

イデックスオイルレポート ~For a week~

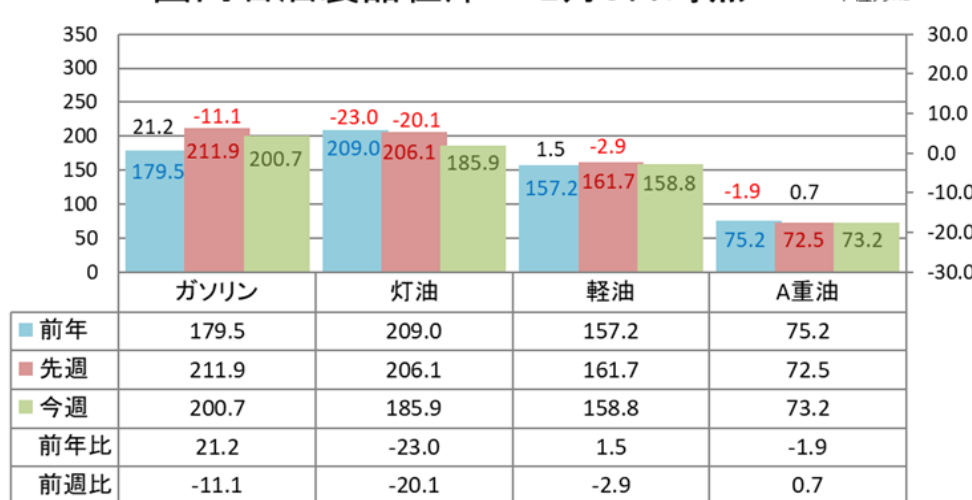
2021/2/12作成 (株)新出光

【概況】 <高値警戒感から上値重くも、下値も支えられ横ばい>

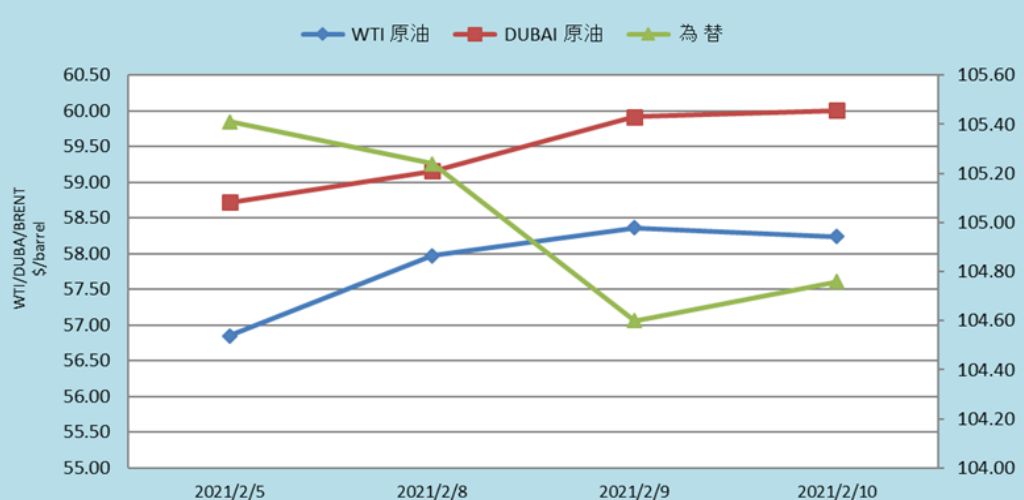
- 5日、外国為替市場では対ユーロでドル安が進行し、ドル建てで取引される原油などの商品に割安感が生じ、原油が買われました。また、バイデン政権による大型追加経済対策への期待が広がる中、早期の経済正常化によるエネルギー需要回復への思惑も投資家心理を支えたようです。
- 8日、OPECプラスは、新型コロナウイルスの世界的な流行が鮮明となった昨年4月以降、計21億バレルの産油量削減を達成し、今年に入ってから高い水準で協調減産合意を順守しているほか、サウジアラビアが2、3月に自主的に追加減産を行う方針を示しており、需給均衡化が近いとの見方が広がりつつあることが相場押し上げ要因です。
- 9日、米エネルギー情報局(EIA)は9日、今年の米原油生産見通しを日量平均1102万バレルと、従来予想の日量1110万バレルから下方修正しました。最近の上昇基調を受けた利益確定の売りや米株価の下落を眺めた売りが朝方に一巡し、また米追加経済対策の早期実現期待が広がり、燃料などの需要回復観測も浮上しています。需給面での楽観的な見方から買いが膨らむ展開となったようです。
- 10日、米エネルギー情報局(EIA)が発表した週間在庫統計では、原油在庫が前週比660万バレル減と、市場予想の100万バレル増に反して取り崩しとなりました。EIAが前日に発表した2021年の原油生産量見通しが下方修正されたことも重なり、需給不均衡に対する警戒感が後退し原油が買われました。ただ、原油相場はこのところの上昇で1年ぶりの高値圏となっており、60ドル台の心理的な節目を目前に高値警戒感から利益確定の売りも出やすく、上値は重かったようです。
- 11日、変異した新型コロナウイルスの感染拡大や各地でのロックダウン延長を理由に、石油輸出国機構(OPEC)が月報で今年の世界石油需要見通しを日量10万バレル程度下方修正したほか、国際エネルギー機関(IEA)も世界の石油供給量は依然として需要を上回っていると指摘したことが投資家心理を冷やし、朝方の外国為替市場でドル売り・ユーロ買いの流れが再燃し、割安感から買い戻しが入り、ほぼ横ばいでの値動きに留まりました。

2月12日 17:00現在 WTI原油 57.80ドル 為替 1ドル 104.87円

国内石油製品在庫 2月6日時点



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ



次回元売変動予測

	2/18~	元売変動予測
ガソリン	→	+1.0~+1.5
灯油	→	+1.0~+1.5
軽油	→	+1.0~+1.5
A重油	→	+1.0~+1.5
LSA	→	+1.0~+1.5

【製品卸価格】 <月間玉の本格的な販売はまだ見られず>

《今週》今週の元売り仕切り改定は「+2.5円」の値上げでした。2月初めからの原油相場の上昇傾向により原油コストも上昇していました。原油相場も上値は重くなってきたものの、来週も値上げが見えているために、月間リンク玉の売り込みはまだ本格的とはなっていないようです。そのため市況としては、改定幅分値上げが進みましたが、元々市況が安いところからの応分の値上げでしたので、市況の改善には繋がっていない状況です。

《2月13日以降》来週の元売り改定は現状の原油コストで「+1.0~+1.5円」の値上げ予測です。月間リンク玉の枠消化具合は判然としませんが、週間玉でも安値対応が各地で散見されており、安値のボトムは依然として週間玉となっています。月間リンクの玉はまだ少し上のレンジで販売していますが、月間平均価格としては今の市況よりも低い価格になる可能性が高いため、現在は利益を取って販売を進めていると思われます。そのため、来週の改定後からは各油種月間リンク玉が市況の安値を形成し、枠消化を進めると考えられます。

【トピック】 <米国エネルギー情報局(EIA)短期見通し>

EIAは新型コロナウイルスへの対応が進化し続けているため、見通しの不確実性が高まっているとしながらも、短期見通しを発表しました。見通しによると米国の国内総生産(GDP)は、2020年に2019年のレベルから3.6%減少しており、米国のGDPが2021年に3.8%、2022年に4.2%成長すると想定しています。またブレント原油の価格が2021年の第1四半期に56ドル/バレル、第2-4四半期に52ドル/バレルになると予想しています。石油在庫の減少とともに石油供給の増加の結果として、2021年後半に石油価格が下がると予想しており、米国のガソリン消費量としても、増加はするも2019年のレベルよりも低いままであると予測しています。2021年後半にはワクチン普及による景気回復で需給が改善するとの予測が多くありますが、OPECやOPEC非加盟国による供給量の増加により価格上昇を抑えてしまう可能性もあり、楽観視できない点もあります。現状の原油価格も上昇要因が多く、続伸していますが高値警戒感から売られる場面もあり、今後の動向としては下落も視野に入れておく必要があるようです。